審査の結果の要旨

論文提出者氏名　瀧本　将弘

瀧本将弘氏の博士論文 Investigating the relative effects of cognitive and non-cognitive approaches on the development of Japanese learners' knowledge of different degrees of certainty（日本人英語学習者の確信度表現習得のための認知言語学的アプローチの研究）の審査結果について以下に報告する。本論文は、日本の大学における論文英語の指導において一つの鍵となる、ステートメントの確信度の表現の仕方について、実証的・実験的手法によって取り組み、実践的な教育効果を挙げた研究である。論文は全７章からなる。

第１章 "Introduction"では、リサーチクエスチョンを提示し、本研究の背景および目的を述べている。これまで応用言語学における認知的アプローチは語彙学習に関するものが多かったが、本研究では、高度なコミュニケーション能力に求められるヘッジ（ステートメントの確かさを緩和する表現）とブースター（ステートメントの強化のための表現）に注目し、特に論文英語における前者の学習を調査する。これらの用法はL2 使用者と L1 使用者の間に顕著な違いが見られることが知られている。本研究における認知的アプローチとは、ヘッジの確かさの度合いを遠近の空間カテゴリーをソースとしたメタファー＜CERTAINTY IS CLOSENESS＞によって理解することを促すものである。これは認知意味論でいうプライマリーメタファーの考えに基づいている。リサーチクエスチョンは以下のとおりである。(1) 認知的アプローチと従来のアプローチそれぞれを採用したときの学習効果の違いはどのようなものか？　(2) 学習者による自学と教師の教示による学習効果の違いはどのようなものか？

第２章 "Literature review: hedges and boosters in L1 and L2"と第３章 "Literature review: cognitive linguistic approach to learning L2"はヘッジ研究、言語習得、機能言語学、認知的メタファー理論にわたる先行研究のレビューにあてられている。本研究は第二言語学習研究と認知言語学の交差点に立つものであり、二つの流れの丁寧な説明が行われている。その上で、メタファーについての意識づけの教育的意義が説明される。

第４章 "Methodology"では、本研究の方法論が述べられている。まず、L2 話者と対比するために、英語母語話者の運用実態の測定が行われる。次に、L2 学習者についての実験調査の方法が述べられている。テストはwriting (WR), comparing (CO), categorizing (CA)の三種類、ヘッジ表現はCERTAIN, PROBABLE, POSSIBLE の三種類に分けて、それぞれ該当する語（形容詞および副詞）を用いた。被験者集団は、認知的アプローチによる学習、従来の語法解説的アプローチによる学習であり、両方のグループについて、教師による教示と、学習者による自学のグループを設けた。認知的アプローチにおいては、概念メタファーをより直感的に、言語を媒介としないで理解できるよう、ビデオクリップを作成して被験者に見せた。調査後、被験者からインタビューを採取した。

第５章 "Results"では、前章で提示した方法論にもとづいて行った実験調査の結果が報告されている。主要な点は以下の通りである。(1) WR, CO, CA すべての課題において、認知的アプローチによる学習者

が、従来のアプローチによる学習者のパフォーマンスを上回った。後者はコントロールグループを上回った。(2) 学習後は認知的アプローチ、従来のアプローチどちらの被験者も、ヘッジの使用頻度に変化が見られた。特に PROBABLE, POSSIBLE 項目の使用が増大し、母語話者の英作文スタイルへの接近が見られたが、この効果は認知的アプローチにおいてより顕著であった。(3) 認知的アプローチによる学習者は、学習後に一定期間をおいて行ったポストテストのスコアが有意に高かった。(4) 学習者による自学と、教師による教示の間には大きな差は見られなかった。

第６章 “Discussion”では、実験調査の結果から読み取れることが体系的に述べられている。総体として、認知的アプローチによる学習は効果的であり、身体性基盤をもった＜CERTAINTY IS CLOSENESS＞というメタファーの概念形成と定着における有効性が示された。認知的アプローチのほうがポストテストのスコアが高かったことから、このアプローチがより定着率の高い学習方法であることが示唆される。これはビデオクリップがより直感に訴えるものであるということと共に、獲得すべき概念モデルがより明確に規定されていることが理由であると考えられる。一方、教師による教示と学習者による自学の間には有意な差が存在せず、学習においては獲得すべき概念の直接的アクセスがより重要であることが示された。

第７章 “Conclusion”は研究全体の意義と展望を述べている。

本論文の学術的意義は、以下の三点に集約される。

第一に、英語教育学における認知的アプローチの応用可能性を拡大し、メタファーを介した意識付けの方法の有効性を示した。

第二に、学習者、教師、どちらが主導する方法でも、有意な差が見られなかった。すなわち教授においてターゲットとすべきモデルの概念把握がより重要であることが示された。

第三に、より具体的なレベルで、大学英語教育における論文指導の中でも重要なポイントであるヘッジ表現の指導について、実際の教育の場において学習効果の向上が見られた。

審査においては、活発なディスカッションが行われた。日本語話者の英作文は、なぜヘッジの使用頻度が低いのかという疑問が出された。話者の態度によるものか、全般的な習熟度の低さによるものか、それとも母語干渉によるものか？　母語干渉という点では、日本語の文法形式の特徴を考慮に入れる可能性と、他の言語、例えば中国語などの話者と比較する可能性が示唆された。また、ポストテストのインタビューでは、教師による教示において振り返りの内容が多様であることが注目された。それはなぜかという点についても議論が交わされた。教師の役割は、今後のコンピュータ技術のさらなる普及にともない、考え直す必要が出てくる。どのような条件のもとで、自習と教師による教示の違いが教育効果の違いをもたらすかは、さらに考察の余地がある。しかしながら、これらの点は論文自体の欠点ではなく、今後の研究のための発展的・創造的な議論であり、本研究の学術的意義は高く評価される。英語教育における認知的メタファー理論の有効性を実証的分析によって示した本研究は、学術的価値がきわめて高く、この分野における優れた研究成果であると判定する。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。